



Title	白血病の治療は進んだ
Author(s)	木谷, 照夫
Citation	癌と人. 1981, 8, p. 8-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24144
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

白血病の治療は進んだ

木 谷 照 夫*

血液の癌ともいえる白血病は不思議なことにテレビや小説に登場することが多いように思われます。ヒロインがこの病気に苦しむ純愛の恋物語や利発で愛くるしい子供がこの病気に侵される悲しい家庭ドラマなどは誰でも数回は見たり読んだりして涙した記憶があるはずです。その理由を考えてみると2、3の思いあたることがあります。まず第1はこの病気は絶対に治ることがなくどのような治療をしても全て死んでしまうという、死が避けられないという条件が作られるということです。悲劇の必須の条件はこの病気にかかるということで充分満たされるわけです。第2の理由はこの病気が子供に非常に多いということです。これもドラマの条件としては好都合なのでしょう。残念ながら子供に多いという事実は時が経っても変わりません。小児の癌は小児の死因の大きな部分を占めており、事故に次いで第2の死因となっています。その小児癌の中で白血病は約半数を占め年間約2000人の発生があるといわれています。

ところで第1の理由にあげた100%致命的であるという現象は最近になって変ってきました。私が医師になった20年以上前には、いや今から10年位前までは白血病という診断がついて治った時はこの診断は誤診であったと考えるべきであるといわれていました。ところが最近になって間違いない白血病でありながら治る人が出はじめました。これはまさに医学研究の進歩の賜物です。

白血病の原因は現在でも分っていません。動物では明らかにウイルスが白血病を起しますが人間では今までのところ人間の白血病がウイルスで生じたという証拠がありません。ウイルスが感染したことがあるのではないかという跡形のようなものは1、2みつかっていますが未だはっきりと白血病細胞からこの原因となるウイルスを取り出した人はいません。確実に白血病をおこす原因となるものの1つは放射線です。

これはあのいまわしい原爆の投下という出来事が証明しています。即ち原爆被爆者の中から大勢の白血病の患者が発生しました。又、防禦施設の乏しいなかで放射線を浴びて仕事をしていたレントゲン科の医師に白血病患者の発生が多かったことも知られています。化学物質も発病の原因になると考えられていますがこれも動物の白血病でしかはつきりしません。ともかくこのように原因がはつきりしませんから根本的な治療が難しいことは当然ともいえましょう。これは癌の場合でも似たことがいえるでしょうが、しかし癌と白血病には絶対的な大きな違いがあります。細胞の種類やよって来たった起源が違うというような基礎医学的なことは別として全く違っていることは癌細胞が身体の一部に集っていて体のあちこちに散ばってはいないということです。このためこの癌の塊を手術によって取り除くと治すことができるわけです。しかし中には手術の時に既に癌細胞が体のあちこちに散ばっていることがあります。これを転移といいます。癌が転移を起している時は手術により助けることが難しくなり、再発が必発ということになります。この散ばった癌細胞を何とか絶滅しようとする薬が抗癌剤です。

ところが白血病では診断がついて白血病だと判った時にはどの例でも全身にこの悪性の白血病細胞は散らばっています。体中をくまなくめぐっている血液の中に悪性の細胞がいるのですから如何んともしがたいことです。勿論、手術ができないことはいうまでもありません。この状態は癌でいえば、全身に癌細胞が転移したようなもので救いようもないということになります。そのため白血病の場合は早期診断、早期治療という癌の場合の原則は成り立ちません。このような理由で白血病は100%致命的な病気だとされていたのです。

白血病の治療はこれまで述べてきた理由から

* 大阪大学教授（微生物病研究所附属病院内科長）

外科的療法は成り立ちません。そこで行われるのが化学療法です。即ち薬剤により白血病細胞を絶滅しようという療法です。化学療法（抗白血病療法）に用いられる薬は悪性の白血病細胞を殺すだけではなく、健全な細胞にも害を与えます。即ち一種の毒物を薬として用いているわけです。抗白血病剤開発の歴史をみると最初に癌や白血病治療に用いられたナイトロジエンマスターは第1次大戦の時ドイツが作った毒ガスから導き出されたものでまさに抗癌剤は毒物から始まったといえます。その後数々の抗白血病剤が開発されました。強力な薬が見出され、実際に供される毎に白血病患者の生存期間は延びていきました。そして遂に治癒したと考えられる患者さんが現われてきたのです。

白血病細胞は健康な血液の細胞が悪性の性格を持つようになったものですから、その元の細胞の種類によって大きく3つの種類に分類することができます。骨髄性白血病、単球性白血病、リンパ性白血病です。又、どの白血病も病状が急激にすんで死亡してしまう急性型と緩やかに進行して、かなり長く生きる慢性型があります。慢性白血病は別にして急性白血病は種類により抗白血病薬の効果が良くあらわれるものと効き難いものがあります。小児の白血病は80～85%が急性リンパ性白血病ですが、この型の白血病が最も薬によく反応するので、小児の白血病は最も白血病化学療法の期待がもてるものです。最近の最も進歩した治療によると半数以上の例で長期に生存し、 $\frac{1}{3}$ の例では完全な治癒が得られる状況になってきました。治療しない場合には数ヶ月の寿命しかない病気ですからいかに治療法が進んだかがおわかり戴けると思います。

残念ながら小児の急性リンパ性白血病以外はこれほどの好成績は得られていません。大人では例え急性リンパ性白血病でも子供の場合ほど良い経過をとるとはいせず、特に老人の場合にはまだまだ非常に悪い結果しか得られていません。ごく最近の日本の集計によると成人の急性白血病で5年以上生存している例は全国で150人といわれています。

このような白血病の治療には抗白血病剤の開発の進歩だけが貢献しているわけではありません

。この治療には支持療法と呼ばれるさまざまな補助的な手段が重要です。補助的とはいっても直接白血病細胞を滅ぼすという働きがないという意味であって、治療全体の中での重要さからすると抗腫瘍剤の重要さに劣るものではありません。これには強力な抗生物質治療と健康な人の新鮮血の輸血が重要です。血液の癌である白血病は血液の中で白血病細胞が増えると対的に健全な白血球や赤血球、血小板という血液の重要な成分が減ります。白血球は外部から細菌が体内に侵入して感染を起すのを防いでいる細胞ですからこれが減少すると感染が起ります。血小板は出血を起させないような働きをしていますので、この減少は脳出血などの生命にかかわる出血を起しかねません。赤血球が減れば貧血です。白血病の患者さんに化学療法を行なうと、やむを得ないことですが、そうでなくとも少ない健全な白血球や血小板が毒性を持った抗白血病薬で一段と減ってしまいます。そこで、これを補ってやらねばなりません。白血病の患者さんに健康な供血者が大勢必要だというのはこのような理由からなのです。最近では一人の健康な人から白血球や血小板など必要なものだけを選択的に分離して取り出す機械が考案され、その時に必要な成分だけを輸血ができるようになり、これを成分輸血といっています。

最近、白血病の特殊な治療法として骨髄移植という方法が開発されてきています。これは白血病細胞を健全な血液細胞とともに薬剤や放射線で完全につぶしてしまい、その後に健康な人から血液細胞の元になる骨髄の細胞をもらって移植する方法です。これも現在のところ誰の骨髄でも良いというわけにもいかずまだ難問をかかえていますが有望な治療法です。

強力な白血病治療により白血病細胞が1個も体内にいなくなった時、治癒したことになります。まだまだ白血病の治療は完成したところまでには至りません。これは全ての癌にもあてはまる事かもわかりません。しかし今まで1人も生き延びることができなかつた白血病の患者さんが命をながらえ、中には結婚して子供まで生まれた人さえ現われてきた現況は希望に満ちたものといえましょう。